

令和4年4月14日

京都府茶協同組合

理事長 森下 康弘 様

特定非営利活動法人こみねっと

京都府宇治市伊勢田町若林 53 番地

理事長 坂牧 修

担当理事 大橋 敏裕



### 後援名義使用許可のお願い

拝啓、陽春の候、貴組合におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

昨年の「こみねっとプロデュース公演『もえぎ』」では大変お世話になりました。おかげさまで好評のうちに終了することができました。

さて今回は、「こみねっと演劇公演『ほうげじゃく』」と題しまして、京都市を代表する日本画家である伊藤若冲と、同時代に生きた煎茶の祖・永谷宗円、煎茶を売り歩き文化人たちを交流させた売茶翁の人生が交錯する物語の創作を予定しております。売茶翁の供する宇治茶が人々の心を通わせ、永谷宗円の茶作りにかかる生き様が後の大画家・若冲の描く世界に影響を与える、宇治茶が重要な役割を果たす人間ドラマです。

また今回は山城地域に加え、伊藤若冲の出生地である京都市を含めた初の2会場公演を予定しております。これまで以上に質の高い上演を目指し、京都市を含めた広範囲の市民の皆さまに、宇治茶の価値と地域への誇りを感じられる舞台を作り上げたいと考えております。

詳しくは別紙「こみねっと演劇公演『ほうげじゃく』企画書」を参照下さい。

つきましては以上のような趣旨をご理解いただき、今夏の公演に際しまして、後援団体としてお名前の使用を許可していただけますよう、心よりお願い申し上げます。

敬具



こみねっと演劇公演

# ほうげじやく

伊藤若冲 その魂のルーツ

日本茶の祖、永谷宗円  
煎茶を広めた僧、売茶翁  
奇想の天才画家、伊藤若冲

同時代を生きた3人と  
市中の人々の生き様を描き、  
生き物すべてに魂をこめた絵の  
ルーツをひもとく物語。



9月3日(土) 19時開演  
京都教育文化センターホール  
京都市左京区聖護院河原町4-13  
京阪神宮丸太町駅徒歩5分

9月10日(土) 19時開演  
9月11日(日) 11時開演  
文化パルク城陽ふれあいホール  
京都府城陽市寺田今堀1  
近鉄寺田駅徒歩8分

|    |    |        |
|----|----|--------|
| 一般 | 当日 | 2,500円 |
|    | 前売 | 2,000円 |
| 学生 | 当日 | 1,500円 |
|    | 前売 | 1,000円 |

若冲：「動植綵絵」より



令和4年4月1日

関係者各位

特定非営利活動法人こみねっと

こみねっと演劇公演『ほうげじゃく』企画書

事業名 こみねっと演劇公演

作品名 『ほうげじゃく』

- ねらい
- 日本茶を発明した永谷宗円と煎茶道の祖である売茶翁、たぐいまれな日本画を描いた伊藤若冲、同時代に生きた3人がどう作用しあったかを描く。
  - 徳川吉宗が財政の立て直しを図り貨幣経済へ大きく移行する時代の息づかいを現代との共通点を見いだしながら描く。
  - 京都に生きた偉大な人物について伝え、地域の誇りが感じられる舞台にする。

作品概要

- ・時代 1736年～42年。1716年に徳川吉宗が将軍となって20年、数々の財政改革を行ったが、この頃は新たな貨幣の定着を図って多くの貨幣を鑄造し財政の安定をはかった。これは成功し以後の基礎になった。一方で農民への税負担が重くなり、農民の不満は高まった。時代の変化と人々の生活を描く。
- ・若冲 舞台で描くのは伊藤若冲の20代の頃。十代半ばから絵を描き始めたとされ、生涯を通じて結婚することもなく絵に没頭したとされている。しかし一方で錦市場の存亡の危機を救うために奔走した記録も残っている。本作の舞台となる時期は父親が急死し、青物問屋という商売を長男として継ぎ家計を維持する役を担わなければならない時だった。若冲はそれでも筆を折ることはなかったし、この時期のあとには、動物や虫、植物が新たな命を吹き込まれたような独創の絵を描き始める。本作では若冲がこのような絵を目指すにいたった経緯を描く。

- ・ 宗円 宇治田原村の農民だった永谷宗円はこの時期に揉んで作る緑の日本茶を完成させた。1738年には江戸へ行って新開発のお茶を江戸の山本屋に紹介、これにより山本屋と本契約し山本屋は繁盛し、宗円の発明した茶は日本中に広まっていった。日本茶のパイオニアが舞台に登場する。
- ・ 売茶翁 若い頃に黄檗山系の禅宗に感化され僧となる。長く佐賀県の寺を守ったが、晩年を迎えたこの時代に京都へ来て、通仙亭という茶店を作り、中国式の煎茶を振る舞うようになる。当時の文化人はやがて売茶翁のもとに寄り合うようになり、若冲は後の代表的な作品に売茶翁からほめ言葉をもらい、とてもよろこんでいる。また人を描くことがなかった若冲が売茶翁を描き、これが売茶翁の貴重な肖像画となって残っている。その売茶翁は宇治田原村までやってきて宗円と会っている。宗円と売茶翁の間にどんな作用が起きたのかを描く。
- ・ 物語 二十歳を迎えた若冲は家業でつながりのある農民や商人と、楽しく生き生きと過ごしていた。また絵も動植物も大好きで大いに恵まれた環境を享受する。しかしこの頃は貨幣経済が生活に定着していく頃で、この過渡期に農民や商人に大きな生活の変化が生まれ始める。そんな中、若冲 23歳の時に父親が急死し、若冲は商家の主人にならなければならなくなる。しかし、当時は「商人は芸事は禁止」と言われていた。また、主人となった若冲にとって農民や商人は商売相手であり、つきあいは厳しいものになっていく。仲が良かったはずの農民にも裏切られ、農民や商人の間でももめ事が絶えなくなる。加えて家を守る自信も大きく揺らぐ。そんな頃、宗円と売茶翁もこの時代を生きている。このふたりとの繋がりが悩む若冲に作用する。いったいどんな作用が起き若冲に何が生まれるのか、ここがこの作品の肝となる。

公演日時・場所

[京都]

京都教育文化センターホール

2022年9月3日(土) 19:00